

研究部だより

NO.14

好奇心と問う力 編

〇はじめに

「好奇心」という言葉に興味をもったことがありますか？先日「子どもは40000回質問する あなたの人生を創る「好奇心」の驚くべき力（光文社未来ライブラリ）」という本を読みました。昨年度の関ブロ千葉大会で発表した内容とも関係するところがあったので、少し取り上げてみます。

◇ 好奇心って何だろう

「知りたい」「体験したい」という、新しいものや未知の事柄に対する強い興味関心や欲求のことで、人が知識を深め、成長するための原動力となり、探求行動を起こす動機づけとなります」と生成AIは答えていました。

◇ 好奇心は必要か

本書の「現代は人類発展の停滞期—もはや賢いだけでは生き残れない」という小題の中で「世界で今必要とされているのは、好奇心にあふれる学習者である（p25）」と書かれています。新たなものを創造するために必要となる「探求心」や「批判的思考」を育む原動力として「好奇心」が注目されているのでしょうか。

◇ 好奇心は育てることができるのか

「好奇心旺盛な子どもとそうでない子の違い」という小題の中で「好奇心旺盛かどうかは生まれた時点で決まっているわけではない（p83）」としていて「子どもが好奇心旺盛かそうでないかは、早い段階での非言語的な問いかけに親がどのように応じるかで決まる（p83）」とあります。少なくとも好奇心自体は先天的なものでないようなので、授業内で指導の工夫の余地がありそうです。

◇ どうすれば好奇心が育つか

「知識こそが、好奇心を持続させる力」の小題の中で「好奇心が失われるのは、親や教師から知識を与えられないときだ（p244）」と書かれています。ですから、好奇心を持続させるには、大人（教師）の働きかけや知識が重要であることがわかります。

◇ 好奇心と質問との関係性は

「子どもは四万回質問する」の小題の中で「質問することは子供であることの最大の証といってもいいくらい本質的な行動（p84）」で、「子どもは2歳から5歳までのあいだに「説明を求める」質問を計四万回行うと推定している（p86）」とあります。また、「問いかけという行動が認知能力を発達させる重要な鍵である（p86）」とし、子供は本来、生まれながらの好奇心を備えており、生きるために必要な知識を得るスキルとして「質問をする」ことを示唆しています。

◇「知識」と「創造性」と「質問」の関係は

「第7章 知識なくして創造性も思考力もない」では「創造性は空白から生まれるわけではない。優れたイノベーターや芸術家は莫大な知識を蓄えていて、必要な情報を無意識に引き出すことができる (p232)」とあります。知識は好奇心を継続させるもので、創造性を高めるものである。そして、その知識を得る・深めるためのテクニックが「質問」にある、ということではないでしょうか。

◇問う力は必要か

「第6章 問いかける力」の中で「質問をするというのは高度な技術 (p191)」であるとし「質問の仕方を変えるだけで、人生が変わる可能性がある (p192)」とまでいっています。そこで、「質問を投げかける方法についても教える必要がある (p191)」としており、質問の方法を学ぶ必要性について触れています。

◇問う力をつけよう

「問う力」は関ブロ千葉大会でこだわった部分です。授業で問う力を身に付けさせるにはどうしたらよいでしょうか。質問には「知識」が必要です。授業後に先生が「質問ありますか」と聞いたとき、生徒から質問があがらないのは「何を質問したらよいかわからない」こともあるかもしれません。

そこで、最初に「質問を考える」ことを授業のまとめの方法とし、授業前に「今日の授業のまとめ方は「質問を考える」ことにする」ことを話せば、授業の集中度も上がるかもしれません。是非、「授業のデザイン活用BOOK」の中にある「問いを創る授業」や「対話型授業」等も参考にしてください。

〇おわりに

中教審から出された次期学習指導要領の話し合いの論点の中で、「学びに向かう力、人間性」において「好奇心」という言葉を見つけました。文科省でも「好奇心」に着目しているのかもしれませんがね。

右図：教育課程企画特別部会「論点整理（素案）」p18の図を一部抜粋

令和7年9月5日中央教育審議会教育課程企画特別部会

文責 研究部（渡邊）



□参考書籍

「子どもは40000回質問する あなたの人生を創る「好奇心」の驚くべき力 (光文社未来ライブラリ)」

右図引用：「光文社書籍情報サイト」

<https://books.kobunsha.com/book/b10127262.html>

